

指導資料

キャリア教育 第5号

鹿児島県総合教育センター
令和2年4月発行

対象
校種

中学校 義務教育学校
高等学校 特別支援学校



これからのキャリア教育の実践に何が必要か —自校の実践を見直し、工夫・改善するためのヒント—

今日の学校教育に期待されるのは、変化の激しい社会を主体的に生き抜くための力の育成であり、教育活動全体を通じて基礎的・汎用的能力の育成を目指すキャリア教育の実践である。キャリア教育の定義を確認するとともに、自校の実践を見直すための基本的な考え方を示す。

1 キャリア教育の提唱初期と今日

我が国でキャリア教育の推進が公的に提唱されたのは、1999年（平成11年）の中央教育審議会答申『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』でのことである。この答申では、キャリア教育を「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義し、小学校段階から発達段階に応じて実施する必要性を提言している。

その背景には、情報化・国際化の急激な進展による産業・経済の構造的変化、雇用環境の多様化が進む中で、新規学卒者のフリーター志向や卒業後に進学も就職もしていないことが明らかかな者の増加など、若者の職業選択や職業観が社会問題化していた状況があった。キャリア教育の推進は、言うならば若年者雇用をめぐる問題への対応策の一つであった。

答申後の関係府省の連携による施策の中で文部科学省が掲げたのが、2005年（平成17年）のキャリア教育実践プロジェクトである。これは「中学校における5日間以上の職場体験活動の実施」等を中核として4年間実施された。この施策で職場体験活動は全国的な広がりを見せた

一方で、「キャリア教育は職場体験活動だけやればよい」という誤った認識が広がったことや、体験活動が「一過性のイベント」となり、職場での経験等が生徒の中で十分に考察できていないといった指摘もなされるようになった。

その現状等を踏まえ、2011年（平成23年）の中央教育審議会答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」と再定義し、社会的・職業的自立に必要な基盤となる能力として**基礎的・汎用的能力**（人間関係形成・社会形成能力/自己理解・自己管理能力/課題対応能力/キャリアプランニング能力）を提示した（図1）。

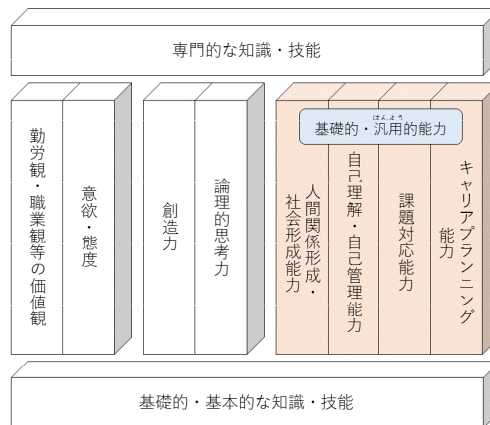


図1 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素 出所：中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（平成23年）※着色は筆者

この答申で留意すべきなのは、キャリア教育は「単に特定の活動のみを実施すればよいということや、新たな活動を単に追加すればよいということではない」として、**日々の教育活動全体を通じて基礎的・汎用的能力の育成を目指した実践への改善**を求めた点である。

今日求められるキャリア教育は、若年者雇用対策の一環に留まるものではなく、**一人一人が社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現する過程を支援するための教育**である。その前提にあるのは、人を「他者や社会との関わりの中で様々な役割（職業人、家庭人、地域社会の一員等）を担いながら生きている存在」として捉える人間観である。

2 キャリア教育の二つのポイント

新学習指導要領（小・中学校：平成29年告示／高等学校：平成30年告示）では、育成すべき資質・能力が三つの柱に整理された。キャリア教育における基礎的・汎用的能力は、この三つの柱に重なるものであり（図2）、学校の教育活動全体でこれらの資質・能力が意識され養われるよう配慮していくことが重要である。

では、どのように取り組めばよいのか。注力すべきポイントは二つある。**第一は「教科等を通じた日々の学び」**である。単元の学習内容そのものや単元のねらいを達成するための授業展開の中にキャリア教育としての価値を見だし、

それを意識して指導することである。

例えば、高等学校数学Ⅰの「データの分析」では日常生活に関連した資料を扱い、現代社会の課題などについて考えをまとめ、発表したり、議論したりする授業展開が考えられる。自らの考えを明らかにすることは**自己理解・自己管理能力**の育成につながり、他者に分かりやすく論理的に伝え、議論することは言語活動によるコミュニケーション能力や自己表現力の育成、ひいては**人間関係形成・社会形成能力**につながるのである。

実践上の留意点は、生徒が「ここで学んでいることは自分にとって意味がある、必要なことだ」と実感できるような授業デザインを工夫することであり、授業の中に単元とは別の“キャリア教育的な何か”を新たに付け加えることではないという基本姿勢をもつことである。

第二は「地域・企業等との連携による体験を通じた学び」である。地域・企業等が協力できる具体的な内容としては、職業人講話や職業人インタビューに係る講師派遣、職場体験活動（インターンシップを含む。）の受け入れなどがある。

このような体験を通じた学びは、生徒が大人の世界（＝未来の自分の世界）との接点を発見する場であり、新たな学習課題や興味を発見したり、自分に不足する部分（＝発展・成長の可能性）に気付いたりする絶好の機会となる。その気付きは、学校における学びの意義の認識を深め、学びに

向かう力をより強めたり、充実させたりするのである。

体験をより有効にするのは、**教師の意識と生徒への声掛け**である。地域・企業等でも「学校での学び」が常に活用され、それが私たちの社会や暮らしを支えているということを教師が見出し、生徒に気付かせることである。教師が明確に意識して伝えなければ、生徒には伝わらないということに留意したい。

キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」と資質・能力の三つの柱

※「基礎的・汎用的能力」に示す4つの能力を統合的に捉え、資質・能力の三つの柱に大まかに整理したもの。

【人間関係形成・社会形成能力】	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
【自己理解・自己管理能力】	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
【課題対応能力】	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
【キャリアプランニング能力】	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

各教科等における学習との関係性を踏まえつつ、教育課程企画特別部会「論点整理」の方向性も踏まえて整理

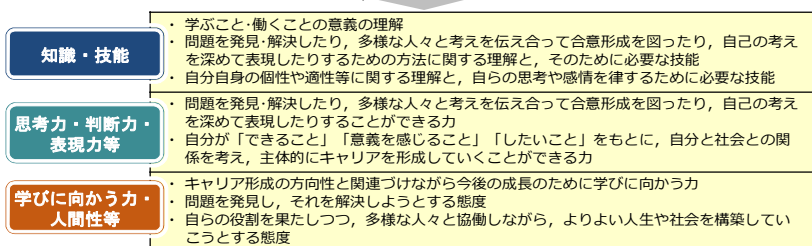


図2 基礎的・汎用的能力と資質・能力の三つの柱 出所：中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（平成28年）※筆者がレイアウトを一部改変

学校単位で地域・企業等との連携を進めるに当たって、まず求められるのは**地域の様々な教育資源**を知ることである。地域の地場産業や事業所、社会教育施設やボランティア団体等は体験学習の重要なパートナーとなり得る。連携によってどのような教育プログラムが実現できるのかを、それぞれの教師が教科や校務分掌の立場から可能性を検討してみるとともに、連携が可能な機関や組織の方々に意見やアイデアを一緒に検討してもらうことも大切である。

なお、鹿児島県教育委員会は、経済7団体と連携し、**未来を拓くキャリア教育推進事業**（学校への講師派遣事業／中・高校生のインターンシップ事業）を行っている。事業の詳細は県教育委員会ホームページに掲載している。自校の実践の充実方策として、事業の積極的な活用を期待したい。

【検索ルート】鹿児島県教育委員会>学校教育>学力 未来を拓くキャリア教育推進事業

3 必要性を増す「ワークルール」の理解

キャリア教育は、その意義が生徒にすぐ実感されるものもあれば、後になって感じられるものもある。国立教育政策研究所は、高等学校卒業生に対して、キャリア教育の取組を在学当時に役立つと感じたか、卒業後になってもっと指導してほしいかを調査分析している。

下の③に注目したい。これは高校生の時には「取り組んでいない（指導がなかった）」が、卒

卒業後に振り返って思うキャリア教育の意義

- ①すぐに「役立つ」と感じられる学習内容
 - ・自分の個性や適性（向き・不向き）を考える授業
 - ・進学に係る費用や奨学金についての情報
 - ・社会全体のグローバル化（国際化）の動向についての学習 など
- ②時間がたってから「役立つ」と感じられる学習内容
 - ・社会人・職業人としての常識やマナーについての学習
- ③高校生のときに「取り組んでおきたかった」学習内容
 - ・就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応についての学習
 - ・転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組みについての学習 など

出所：国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター『再分析から見えるキャリア教育の可能性—将来のリスク対応や学習意欲・インターンシップ等を例として—』（平成28年）※下線は筆者

業後に振り返って「もっと指導してほしいか」と思う学習内容である。変化が激しい社会では、長期的なキャリアの展望をもちづらく、様々なリスクに直面することが予想される。とりわけ働く上での様々なトラブルや問題に対処していくには労働法や制度などのワークルールの理解が必要であり、これらの学習内容に対するニーズは潜在的に高いと言える。

厚生労働省は、高校生等がワークルールについて更に理解を深めるため、労働法等の授業が一層充実して行われるよう高等学校教員等のための資料「『はたらく』へのトビラ～ワークルール20のモデル授業案～」を作成している。

収録されたモデル授業案のテーマは、「最低限！働くことのきまり」、「働く環境を適切に選ぶには」など、公民科や家庭科等の学習内容に重なるものや特別活動の授業を想定している。簡単なクイズから、話し合い、ロールプレイ、探究的学習など様々な手法が提案されており、生徒が深く考え、調べたり、探究したりする授業展開が可能である。学校の実態や生徒の特性等に応じて指導方法の選択や工夫を加えるなどして、知識の理解と基礎的・汎用的能力の育成を図りたい。



【検索ルート】厚生労働省 労働条件ポータルサイト「確かめよう労働条件」> 「『はたらく』へのトビラ～ワークルール20のモデル授業案～」

4 キャリア・パスポートの意義

キャリア教育に関わる活動（「教科等を通じた日々の学び」「地域・企業等との連携による体験を通じた学び」など）をつなぐのが「要」としての特別活動である。

2020年（令和2年）度から、小・中・高等学校でキャリア・パスポートの活用が始まった。キャリア・パスポートは、特別活動を要として各教科等と往還し、生徒が自らの学習状況や

キャリア形成を見通したり、振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことで、主体的に学ぶ力を育み、自己実現につなぐことを目的としている。その様式等については文部科学省が例示し、各教育委員会及び各地域・各学校で柔軟にカスタマイズすることを前提にしている。

実践する上で鍵となるのは、**生徒の自己評価と教師の対話的な関わり**である。キャリア・パスポートは、各学校段階において生徒が自ら記録し、学期や学年、入学から卒業までの学習を見通し、振り返り、将来への展望を図ることができる内容に厳選するとともに、生徒の自己評価の場を学級活動・ホームルーム活動の時間を中心に学習活動として位置付けることが重要である。もちろん、その過程には教師の適切な指導が必要である。生徒に書かせて終わりではなく、教師がコメントを記入するなどの対話的な関わりが生徒の成長を促すのである。そのような取組から作られるキャリア・パスポートは、教師にとって、生徒一人一人のよさや可能性を積極的に認め得る重要な資料となるのである。

5 生徒の将来展望をどう支援するか

キャリア・パスポートでは、「将来どういう生き方をしていきたいか」などの問いで生徒に将来を展望させる場面が想定される。だが、「今年小学校に入学した子供たちの65%以上は大学卒業時には今は存在していない職業に就くだろう(キャンシー・デビッドソン/2011年)」という予測が出るほど変化の激しい社会にあって、生徒の将来展望をどのように支援すればよいのか。

キャリア研究の分野で近年、米国の心理学者 J. D. クランボルトが提唱した**計画的偶発性理論**(Planned happenstance theory)が注目を集めている。

従来のキャリア理論は、目標を定め、自分や周囲の状況を理解し、自分のスキルアップに向けた計画を策定し、それを粛々とこなしていくことが重要というものであった。

これに対し、計画的偶発性理論は、長期にわ

たる個人のキャリアは、決して計画に基づいてのみ歩まれているわけではなく、むしろ偶然の出来事や出会いなどによって決まっていくことが圧倒的に多いとする。したがって、この理論では偶発的な出会いを豊富にすれば、キャリアも人生も豊かになるという考えに立つ。ただし、偶発的な出会いは漫然と待っていて訪れるものではなく、それを呼び込むような日々の努力(行動)が求められる。同理論は、そのために必要な資質を五つにまとめている。

偶然の要因を自分のキャリアに活かすために必要な資質

- 好奇心 (curiosity)
- 粘り強さ (persistence)
- 柔軟性 (flexibility)
- 楽観性 (optimism)
- リスクテイキング (risk taking)

出所：下村英雄「キャリア心理学⑧ ブランド・ハップンスタンス理論」『指導と評価』2019年(11月号)、日本教育評価研究会

つまるところ、「計画的」(Planned)が意味するのは、小さくても一つ先の目標を立てて、手近な機会に挑戦し、試行錯誤する中で自己の転換を図りながら学び続けるからこそ、人には偶発的な出会いが訪れるということである。

当面の目標を立て、まずは一歩。歩き出し、作っては壊し、壊しては作るを繰り返しながら自分のキャリアを作り上げる——キャリア・パスポートの指導に当たっては、生徒の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めていきたい。

—引用・参考文献—

- 中央教育審議会『初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)』平成11年
- 中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』平成23年
- 文部科学省『高等学校 キャリア教育の手引き』平成23年
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 総則編』平成30年
- 藤田晃之「キャリア教育とは何か—その意義と必要性—」『MINERVA はじめて学ぶ教職⑨ キャリア教育』2018年、ミネルヴァ書房
- 児美川孝一郎『夢があふれる社会に希望はあるか』2016年、ベスト新書
- J. D. クランボルト, A. S. レヴィン(花田光代 訳)『その幸運は偶然ではないんです!』2005年、ダイヤモンド社
(教科教育研修課 甲斐 修)